

ミステリ読書案内

2022. 11. 25 発行元

第420号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

阿津川・斜線堂「あなたへの挑戦状」

9月に講談社から面白い本が出ていた。私の住んでいるところの書店では見かけなかった。入荷が少なかったのだろうか。たまたま都市の大型書店に行った時に発見。大切な作品を見逃してしまうところだった。

「あなたへの挑戦状」とは？

題名を見た時、作者の阿津川と斜線堂から読者への「挑戦状」だと思ったのだ。でも、ここから既に仕掛けがあったのだなあ。どのような「挑戦状」だったかは、巻末の『執筆日記』に詳しく書かれている。

帯には「ネタバレ厳禁」と書いてあるし、「初版限定・袋綴じ『挑戦状』封入」と気を引くメッセージが載っている。こういう「遊び心」みたいなものはミステリに必要なものだなと思う。久しぶりにハサミで切り開く袋綴じ。

阿津川「水槽城の殺人」

2編の中編が合わさった形になっている。最初が阿津川辰海の『水槽城の殺人』。扉を開くと、上に登場人物一覧、下に水槽城の見取り図が出てくる。城は三階建てで、常識外れの構造になっている。建物の正面に位置する巨大水槽が一番の目玉なのだが、この図だけではイメージを作りにくいのが難点。

そして間もなく二組の夫婦の四

人の中に被害者と犯人がいるとの宣言が出される。「すでに手掛かりは配置されている」…とのこと。阿津川らしい雰囲気期待感が膨らむ。このエピグラフには嘘は書いていないそうである。

その夜のうちに事件は起こり、火災報知器が鳴り、煙が出て、シャッターが降りる。取り残された場所に死体が…。密室と言えりような…。読み進めていくと時間差があるところがポイントになる。解決はかなり苦しうに見えないでもないが。

斜線堂「あいふれた眠り」

後半は斜線堂有紀の『ありふれた眠り』になる。阿津川と斜線堂のミステリに対する考え方の違いや作風が対比できて面白い。斜線堂は基本的に「本格ミステリ」の書き手ではないと感ぜられる。

僕(丹内一寿)が自宅に帰ると妹の千百合が前で待っていた。芸術大学受験のため三日間泊まらせてもらえないかと言う。一寿がOKを出して勤め先のホテルに行くと、次の日の朝にホテルの部屋で死体が発

「競作」という手法

本書は一種の「競作」の形を取っている。一般的に「競作」のルールがあるわけではない。出版社の企画としてテーマなりが設定され、何人かの作家が作品を並べれば、それで「競作」が出来上がる。講談社ノベルスでは『密室本』という一連のシリーズが出された時もあった。本書の「競作」の意味合いはもう少し縛りが強いようだ。

見された。警察が捜査に入ると、被害者はその芸術大学の教授であることが判明。不思議なことに、犯人は殺人を行った後、その部屋で一晩睡眠を取ったような形跡が残されていた。死体がすぐ傍にあるのに眠ることができるのか…。

フランス・ミステリのような感覚。一寿の視点から描かれているので、行ったり来たり思考の世界に引き込まれていく。

「執筆日記」が読み応えあり

巻末の『執筆日記』が上下二段になっていて、斜線堂と阿津川の創作過程が書かれてある。これが読みごたえがある。本書の成り立ちがわかる。「なるほどそういう意図だったのかあ」と仕掛けがわかり、納得が行くというもの。

芦辺拓「名探偵は誰だ」

4月に光文社から出た本。芦辺拓は森江春策を名探偵に据えた本格ものや歴代名探偵登場のパスティーシュの作品を書き続ける幅広い作風の持ち主。今回はパット・マガーの『被害者を捜せ!』『探偵を捜せ!』などの形に似た趣向の本である。光文社の雑誌『ジャーロ』に連載された7編を集めた短編集。趣向の性質上、独立した話で構成されている。

第一話は『犯人でないのは誰だ』。工房勤めの私(田無清広)は招待状をもらった河畔亭ホテルにやってきた。街の金融業者である伯父の大坪徳馬に会社を引き継げと言われている。ホテルに泊まった客の四人の中の三人が私を亡き者にするための相談をしているのを聞いてしまう。姿は見えず声だけ…。「犯人ではない一人」を見つけて助けを求めなくてはならない…。さて「犯人ではない」のは誰か。各人の発言の中からヒントを見出すというもの。以下、『捕まるのは誰だ』『殺されるのは誰だ』『畏をかけるのは誰だ』『生き残ったのは誰だ』『怪盗は誰だ』『名探偵は誰だ』と続いていく。フーダニットの変形判。芦辺が仕掛けた組み立てが読みどころである。ただ、上手に結論に結び付いているものもあれば、今一つピンとこないものもある。表題作の『名探偵は誰だ』は、作者が仕掛けた叙述トリックといったところか。「なるほど、そうか!」という仕掛け。